

行解相應

特257

50

6

TR

353



始



特 257
353



古佛の行持を聞き、その垂範を仰慕するとき、菩提の影
業生心水の中に現じ、刹那と雖も亦二境を離れ、その靈光
に一如たるを覺ゆ。刹那はこれ萬劫の基、若し幸に念々相
續して、一日の行持復報恩底の歡喜となすを得べきか。ま
づ勝鬪をたづね、入處を求めて、廻光返照の資とす。假に
題して行解相應といふ。

昭和八年七月三日

不言庵主



目次

一	開 草鞋若干底	九	金鱗始遇
二	丙丁童子來求火	十	平常心是道
三	正師を求む	十一	神通妙用
四	隨身行持	十二	且暮
五	趙州洗鉢	十三	坐
六	凡心を盡くせ	十四	拜
七	南陽淨瓶	十五	語默
八	發慙驚心	十六	時節因緣
	臨濟大悟	結	法王法

行解相應

(開)草鞋若干底

了庵慧明禪師、相州の人、幼にして建長に出家す。偶念へらく「參禪は明師に遇はざれば恐らくは差別を生じ徒に勤苦を費さん。聞く通幻禪師は永平の六葉、人の爲に釘楔を抜くの力ありと。日月飄然たり、豈株を守り小岐に留まらんや」と。遂に發して永澤に到る。幻の門庭峻絶にして來る者多くは入室を許さず。師初て到るに、幻問ふ「何處より來る」

〔相州〕

〔路多少ぞ〕

「七百餘里」

「草鞋若干底を踏破すや」

「數を記せず」

幻、齋頭に打つて云はく「老僧が此の間、恁麼の飯袋子を著けず」と。師、言下に大悟す。便ち偈を説いて所悟を述ぶ。幻、印記して入室を許す。

一 丙丁童子來求火

金陵報恩院の玄則禪師、法眼の會にありて監寺に充つ。一日法眼云はく「監寺、汝、此間に在ること多少の時ぞ」

「和尚の會にあること已に三年」

「汝は是れ後生、尋常何ぞ事を問はざる」

「玄則敢て和尚を瞞ぜず、玄則曾て青峰の處に在りて箇の安樂を得たり」

「汝甚の語に因つてか得入す」

「玄則曾て青峰に問ひき、如何なるか是れ學人の自己と。峰云はく、丙

丁童子來求火と」

「好語なり。祇恐る汝會せざることを」

「丙丁は火に屬す、火を以て火を求むるは、自己を以て自己を求むるに

似たり」

「情に知る汝會せざることを。佛法若し是の如くならば今日に到ら

じ」

則、操悶して便ち起つ。中路に至つて、却つて云はく「佗は是れ五百人の善知識なり。我を不是といふ必ず長處あらんと。却回して懺悔す。

眼云はく「但問ひ將ち來れ」

「如何なるか是れ學人の自己」

「丙丁童子來求火」

則、言下に大悟す。

二 正師を求む

面山和尚云。初心の學者は、正師を求めねば一生を誤るほどに、先づ三寶龍天に誓願し、正師に見ゆる因縁を憑むべし。

余二十一の春、遍參に出るゆへに、二十歳の秋八月に、肥後金峰山の金剛藏王殿に籠りて、寶龕の鑰の穴より願狀を献じて、日々金剛經を讀誦して、藏王菩薩に祈るは、來春は海東へ遍參に發足す、自眼不明ゆゑに、參師の正邪分れず、大慈大悲正師に見えさせたまへと。七日籠りて結願の日、告暇の禮拜しければ、右の鑰の穴より小蛇が禮拜の頂上にさしかかりて出でたり。籠山の結願とて前夜より法友が訪ひに來たが、之をみて、これは大願成就の驗なりとて感喜しけり。

三 隨身行持

孤雲懷奘禪師、叡山の圓能法師に従ひ落髮し、止觀を學ぶ。母誠めて云はく、「我、汝をして出家せしむるは、上綱の位を補し、公上の交りをなさしめんとにはあらず。名利の學業をなさず、黒衣の非人にして、往來唯かちより行けと思ふのみなり」と。師きいて忽に衣を更め再び山に上らず。

然るに道元禪師、宋より正法を傳へて歸朝し、建仁寺に在りとき、赴き參ず。見性靈知の事を談ずるに違背なし。我が所得實なりと思つて、愈敬歎を加ふ。稍日數を経るに元師頗る異解を顯はす、外に義ありて悉く相似ず。更に發心して伏承せんことを乞ひ、時を俟つ。

文曆元年、元和尙入室を許し、晝夜祖道を談ず。聽許ありしより後相隨つて一日も師を離れず。影の形に隨ふが如くにして、二十年を送る。

設たてひ諸職しよしやくを補たすすと雖も必ず侍者じしやを兼ね。職務しやくむの後のちは又侍者司じしやしに居ゐす。故ゆゑに云いはく「元和尙げんわしやうの門人多かかりしかども、我われ獨ひとりり函丈かんぢやうに獨歩どくほす。人の聞きかざる所ところを聞きけることはありと雖も、他ほかの聞きける所ところを聞きかざることなし」と。

二十年中じふねんちゆう、使命しめいに依よつて療病りやうびやうせし時とき、師顔しげんに向むかはざること首尾しゆび十日じふにちなり。永平えいへいの法席ほふせきをついで十五年じふごねんの間ま、方丈ほうぢやうの傍かたはらに先師せんしの影かげを安やすじ、夜間よかんに珍重ちんぢゆうし、曉天きやうてんに和南わなんして一日いちにちも怠たらず。世々よよ生々せいせい奉侍ほうじを期もちし、卒つひに釋しやく尊阿難そんあなんの如ごとくならんと願ねがひき。尙なほ今生こんじやうの幻身げんしんも相離あひりれざらん爲ために、遺骨いこつを師塔しだつの侍者位じしやゐに埋うめしめ、別わかに塔だつを立てず。又また我が爲ために佛事ぶつじを修しゆせんことを恐れ、先師せんし忌き八箇日はつかんにち中ちゆう一日いちにちの回向くわうきやうに預あづからんことを願ねがひ、同月どうげつ二十四日じふににちに終焉しゆうえんありて、願樂くわんらくの如ごとく、開山かいざん忌き中ちゆう一日いちにちを占うむ。志氣しきの切せつなること顯あはる。

四 趙州洗鉢

僧そう趙州ぢゆうしゆうに問とふ、「學人がくじん乍しばしば入叢林にゆうじゆりん、乞こふ師指示ししじせよ」

州云しゆういはく「喫粥きつしゆく了りやうや、また未まだしや」

「喫き了りやう」

「鉢盂はつむを洗せんひ去され」

五 凡心を盡くせ

龍潭りゆうたん崇信しゆうしん禪師ぜんし、天皇てんかう道悟だうぶ禪師ぜんしに問とふ、「某たつ到來たうらいより心要しんぎやうの指示ししじを蒙まうらず」

「汝なんぢ到來たうらいより、吾われ未まだ嘗かて汝なんぢに心要しんぎやうを指ささゝるはなし」

「何處どこにか指示ししじす」

「汝なんぢ茶ちやを擎さげ來きれば、吾われ汝なんぢがために接せつし、汝なんぢ食じきを行なじ來きれば、吾われ汝なんぢがため

に受く。汝和南する時、吾便ち低首す。何處にか心要を指示せざる。

崇信禪師低頭良久。道悟禪師云はく「見る時は則ち直下に便ち見よ。擬思すれば即ち差ふ」。師當下に開解。仍ち復問ふ「如何か保任せん」。「性に任せて逍遙し、縁に随つて放曠せよ。但凡心を盡くせ。別に勝解なし」。

六 南陽淨瓶

僧、南陽の忠國師に問ふ「如何なるか是れ本身の盧遮那」。

「我が爲に淨瓶を過ごし來れ」。

僧、淨瓶をもつて到る。師云はく「却つて舊處に安ぜよ。著」。

僧、復問ふ「如何なるか是れ本身の盧遮那」。

「古佛過古すること久し矣」。

七 發慙驚心

道元禪師云。慶元の舶裏、年六十歳ばかりの一老僧、和樁をたづね買

ふ。山僧請じて之を問へば、阿育王山の典座なり。

山僧問ふ「幾時か彼を離る」。

「齋了」。

「育王は這裏を去るいくばく」。

「三十四、五里」。

「幾時か寺裏にかへり去るや」。

「如今、樁を買ひ了らば便ち行かん」。

「今日期せずして相會す、豈好結縁にあらざらんや。道元、師を供養せ

ん」。

「不可なり。明日の供養、吾若し管せずんば、便ち不是にし了らん」。

「寺裏何ぞ同事の理會するなからんや。典座一位不在なりとも什麼の欠闕かあらん」

「吾老年に此職を掌る、乃ち耄及の辨道なり。何を以てか他に譲るべけんや。又來れる時未だ一夜宿の暇を請はず」

「座尊年何ぞ坐禪辨道、古人の話頭を看せず、煩はしく典座に充て、只管作務して何の好事かある」

座、大笑して云はく、「外國の好人、未だ辨道を了得せず、文字を知得せざるあり」と。山僧、これを聞き忽然として發慙驚心す。

八 臨濟大悟

臨濟禪師、黃檗の會下に在り、行業純一なり。首座睦州、是れ後生なりと雖も、衆と異なるを歎じ問ふ、「上座此にあること多少の時ぞ」

「三年」

「曾て參問すや、又いなや」

「曾て參問せず、知らずこの什麼をか問はん」

「汝、何ぞ去つて堂頭和尚に問はざる、如何なるか、是れ佛法的々の大意と」

師、便ち去つて問ふ。聲未だ絶えざるに、黃檗便ち打す。師下り來る。

首座云はく、「問話作麼生」

「某甲問聲未だ絶たざるに、和尚便ち打す。某甲會せず」

「但、更に去つて問へ」

師又去つて問ふ。黃檗又打す。是の如く三度問を發して三度打せらる。

師來つて首座に云はく、「幸に慈悲を蒙りて、三度問ひて三度打たる。自ら恨む障縁あつて、深旨を領せざるを。今且く、辭し去らん」

「汝若し去らん時は、須く和尚を辭して去るべし」

師、禮拜して退く。首座先づ和尚の處に到り、告ぐ「問話底の後生、甚だ如法、若し來り辭せば、方便して接せよ、一株の大樹となり天下の蔭涼となり得ん」。師去つて辭す。黄檗云はく「別處に往かざれ。汝、高安灘頭大愚の處に去れ。必ず汝の爲に説かん」。師、大愚に到る。

大愚問ふ、「什麼の處より來る」

「黄檗の處より來る」

「黄檗何の言句かありし」

「某甲、三度、佛法的々の大意を問うて、三度打たる。某甲過ありや過なしや」

「黄檗與麼に老婆なり、汝が爲に徹困、更に這裏に來つて、有過無過を問ふ」

師、言下に大悟し云はく「元來黄檗の佛法多子なし」と。大愚把住して云はく「這の尿牀の鬼子、適來は有過無過を問ひ、如今は却て黄檗の佛法多

子なしと道ふ。汝、什麼の道理をか見る、速にいへ速にいへ」。師、大愚の脇下をつくこと三拳。大愚托開して云はく「汝が師は黄檗なり、我が事にあづからず」。師、大愚を辭して黄檗に卻回す。

九 金鱗始遇

夾山、道悟の教に依つて席を散じ服を改め、華亭に至る。船子來るを

見て問ふ「座主、甚寺に住す」

「寺は則ち住せず、住すれば似ず」

「汝いふ似ずと、箇の什麼にか似たる」

「是れ目前の法にあらず」

「甚處より學び得たる」

「耳目の所到にあらず」

「一句合頭の語、萬劫の繫驢橛。絲千尺を垂る意、深潭に在り。鈎三寸

を離る。子何ぞいはざる

山口を開かんと擬す。子、水中に打ち落す。山、纔に出づ。子、又云はく「道へ道へ」。山口を開かんと擬す。子、又打つ。山、忽然として大悟す。乃ち點頭三下す。

子云はく「竿頭の絲線君が弄するにまかす。清波を犯さず意自ら深し」

「綸を抛ち鉤を擲ち師意如何」

「絲緑水の浮に懸りて有無の意を定む。速に道へ、速に道へ」

「語、玄を帯んで路なし。舌頭談じて談ぜず」

「江波を釣盡して、金鱗始めて遇ふ」

山、遂に耳を掩ふ。子云はく「如是、如是」。乃ち囑して云はく「吾、薬山に在りて二十年、方に此事を明らめ得たり。汝、今已に得たり。向後、城隍聚落に住する莫れ。須く身を藏する處、蹤跡を没すべし。蹤跡を没する

處身を藏する莫れ。深山裏、鑿頭邊一箇半箇を接取し、我が宗を嗣續し斷絶せしむるなかれ」

山、旨を領し禮辭し、岸に上つて去る。頻々首を回らす。子、復喚んで云はく「闍梨」。山、首を回らす。子、船橈を舉げて云はく「別に更にあるあり云ひ了つて、自ら船を踏躡して煙浪に没す」。

十 平常心是道

瑩山和尚、介祖に大乘に侍す。祖、上堂、平常心是道の話を擧す。

南泉因に趙州問ふ「如何なるか是れ道」

「平常心是道」

「還つて趣向すべきや否や」

「向はんと擬すれば即ち乖く」

「擬せずんば争か是れ道なることを知らん」

「道は知にも屬せず、不知にも屬せず。知は是れ妄覺、不知は是れ無記、若し眞に不疑の道に達せば猶大虚の廓然として洞豁なるが如し。豈強いて是非すべけんや」

州、言下に頓悟す。

和尚、之を聞いて豁然徹證。乃ち云はく「我會せり」

「作麼生か會す」

「黒漆の崑崙夜裡に走る」

「未在更に道へ」

「茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す」

祖、笑うて云はく「子、向後當に洞上の宗風を起すべし」

十一 神通妙用

大瀉臥す。仰山來參。大瀉乃ち轉面向壁臥す。仰山云はく「慧寂は

和尚の弟子、形迹もちひざれ。大瀉起きんとす。仰山即ち出づ。大瀉召す。「寂子」。仰山かへる。大瀉云はく「老僧夢を説かん。きくべし」

仰山頭をたれて聽勢をなす。

「わが爲に原夢せよ。看ん」

仰山、一盆の水、一條の手巾をとり來る。大瀉つひに洗面す。洗面終りてわづかに坐するに香嚴來る。大瀉云はく「われ適來寂子と一上の神通をなす。不同小々なり」

香嚴云はく「智閑、下面に在りて了々に知得す」

「子試に道取すべし」

香嚴即ち一盃の茶を點來す。大瀉ほめて云はく「二子の神通智慧、はるかに鶯子目連よりもすぐれたり」

十二日 暮

寂室禪師、毎晨自ら頭顱を摩し、又身の袈裟を顧み、心に念じ口に述べ
て云はく「吾は是れ釋迦牟尼佛の遠裔、たとへ喪身失命すとも誓つて毘
尼軌範を壊せず」と。

伊庵禪師云はく「今日も亦只麼にして過く、未だ知らず來日の工夫い
かん」と。必ず涙下る。

十三 坐

僧、百丈に問ふ「如何なるかこれ奇特の事」
丈云はく「獨坐大雄峰」

○ 天童如淨禪師、一僧の眠れるを嚴誡して云はく「參禪は須く身心脱落

なるべし、只管打睡して什麼をか爲す」と。道元禪師、傍に於て豁然大悟。
直に方丈に到り、焼香す。淨云はく「焼香の事作麼生」

「身心脱落し來る」

「身心脱落。脱落身心」

「這箇は是れ暫時の伎倆、和尚妄に某甲を印する莫れ」

「我れ妄に汝を印せず」

「如何なるか是れ妄に印せざる底」

「脱落身心」

道元禪師禮拜す。如淨禪師云はく「脱落脱落」と。

○

南嶽馬祖に問ふ「大德、坐禪して箇の什麼をか圖る」
「作佛を圖る」

一日南嶽乃ち一磚を取り、祖の庵前の石上に磨す。祖遂に問ふ「師、什麼

をかなす

「磨して鏡を作らん」

「塼を磨す、豈鏡と成すを得んや」

「坐禪して豈作佛を得んや」

十四 拜

黄檗、日に五百拜。師鹽官に在り。時に唐の宣宗、沙彌たり。殿上、師の佛を拜するを見て問ふ「佛に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いても求めず、長老、禮拜何の求むる所ぞ」

「佛に著いても求めず、法に著いても求めず、僧に著いても求めず、常に禮することは是の如し」と。一掌を下す。

○ 瑩山和尚の母、頂戴隨身の觀音に祈誓して云はく「我が懷妊の子、聖者

となり、善知識となつて、人天を益すべくば、產生平安ならしめたまへ。

然らざれば觀音威神力を以て胎内に朽失せしめたまへ」と。毎日一千三百三十三拜。

○ 常不輕菩薩、但行禮拜。人毎に禮拜讚歎して云はく「我れ敢て汝を輕しめず。汝等皆當に作佛すべきが故に」と。罵詈せらるれども改めず、瞋を發せず。

○ 如淨禪師曰はく「汝は是れ後生と雖も頗る古貌あり。直に須く深山幽谷に居して佛祖の聖胎を長養すべし。必ず古徳の證處に至らん」と。時に道元起つて拜を禪師の足下に設く。禪師唱へて云はく「能禮所禮性空寂、感應道交難思議」と。

十五 語 默

東印度國王、般若多羅尊者を請す。齋の次、王乃ち問ふ、諸人盡く經を轉ず、尊者なにとしてか轉ぜざる。

「貧道出息衆縁に隨はず、入息蘊界に居せず、常に如是の經を轉ずる百千萬億卷、但一卷兩卷のみにあらず」

○

藥山、久しく陞座せず。院主白して云はく、「大衆久しく示誨を思ふ、請ふ和尚說法したまへ」。山、鐘を打たしむ。衆方に集る。山、陞座。良久、便ち下座、方丈に歸る。主後に隨つて問ふ、「和尚適來衆の爲に説法を諾す。如何ぞ一言を垂れざる」。

「經に經師あり、論に論師あり。争てか老僧を怪み得ん」

十六 時節因縁

大滂、百丈に在つて典座となる。一日方丈に上つて侍立す。

百丈問ふ、「たぞ」

「靈祐」

「汝爐中を撥せよ。火ありや否や」

師、撥して云はく、「火なし」

百丈、躬ら起ち、深く撥し、少火を得て、示して云はく、「これはこれ火ならずや」

師、發悟禮謝し、其の所解を述ぶ。丈云はく、「是れは乃ち暫時の岐路。經に云はく、佛性を見んと欲せば、當に時節因縁を觀ずべしと。時節既に至れば、迷ふて忽ち悟るが如く、忘れて忽ち憶ふが如し。方に省みれば、己物なり。他より得るにあらず。故に祖師曰く、悟了は未悟に同じ、無

心にして無法を得ると。只是れ虚妄なく凡聖等しく本來の心を心とす。法元自ら備足す。汝今既に爾り善く自ら護持せよ」

(結) 法王法

世尊一日陞座。文殊白槌して云はく「諦觀法王法。法王法如是。」
世尊便ち下座。

○

百丈和尚、參の次、一老人有り常に衆に隨つて法を聽く。衆人退けば老人も亦退く。一日退かず。師遂に問ふ「面前に立つ者は復是れ何人ぞ」

「諾、某甲は非人なり、過去迦葉佛の時に於て曾て此の山に住す。因に學人問ふ、大修行底の人、還つて因果に落つるやまたなしやと。某甲對へて云はく、不落因果。五百生野狐身に墮す。今請ふ、和尚一

轉語を代へて、野狐を脱せしめよ」といふて、遂に問ふ、

「大修行底の人、還つて因果に落つるやまたなしや」

「不昧因果」

老人言下に大悟し、作禮して云はく「某甲已に野狐身を脱す」と。

無門禪師云はく、不落因果、甚としてか野狐に墮す。不昧因果、甚としてか野狐を脱す。若し者裏に向つて一隻眼を著得せば、便ち前百丈贏ち得たり風流五百生なることを知得せん。

昭和八年七月二十日 印刷
發行所 東京市豊島區日白町
三丁目三五七番地
三澤朝一
印刷所 東京市小石川區大塚町三番地

實業取組
光成館書店
總發行所 東京二九八〇八番

行印社工秀

終

